

敬天新聞社 御中

今年3月、それまで隠ぺいしてきた本学医学部における公的研究費の不正利用が新聞にすっぱ抜かれ、それを知った文科省は激怒し、本学の運営に不可欠な補助金の支給が停止されて執行部は右往左往したのですが、「喉元過ぎれば熱さ忘れる」で、またしても不祥事を隠ぺいしようとしています。

今回隠ぺいしようとしている不祥事とは、神奈川県相模原市の大学病院本院の血液内科で起きた医療死亡事故です。

事故の内容は、研修医が患者のリンパを処置していたところ、動脈を傷つけ、出血多量で死亡させたというのです。

この事故を起こした血液内科の主任教授は、医学部長でもあり、事故処理に専念するため、外来の診療は休診としました。(ホームページ上のお知らせを添付)

血液内科を設けている病院は少なく、外来を休診にすると多くの血液疾患の患者が困るのは必然であります。

診療にあたっては細心の注意を払ってミス避けなければなりません。しかし、100%ミスを起こさないということは不可能です。この世にミスをしたことがない医師はいません。ミスは最小限にとどめなければなりません。そして、ミスが起きた時は以後同様のことが起きないように原因を追及しなければなりません。これが医道の常道であるにもかかわらず本学は隠ぺいしようやむやにしようとしています。

亡くなった患者の遺族は病院に対して強い不信感を抱いており、憤慨しています。

現在の北里大学病院には海野院長をはじめとして技量の低い医者ばかり集まっているため、事故は頻発しています。そのため今回の事故が露呈する

と過去に発生した事故も露呈すると恐れ隠ぺいに躍起になっています。

このような倫理観の欠けた大学においてまともな医者を育て上げることはできません。

亡くなった患者のためにも、我が国の医療のためにも、この忌まわしい事件を貴紙において取り上げていただき、社会に訴えたいいただきたくお願い申し上げます。

北里大学病院医療職